

# 正光寺開山四百年忌報恩記念事業だより

正光寺遠忌委員会広報誌 第9号 平成29年4月1日発行

## 特集 正光寺の花まつり



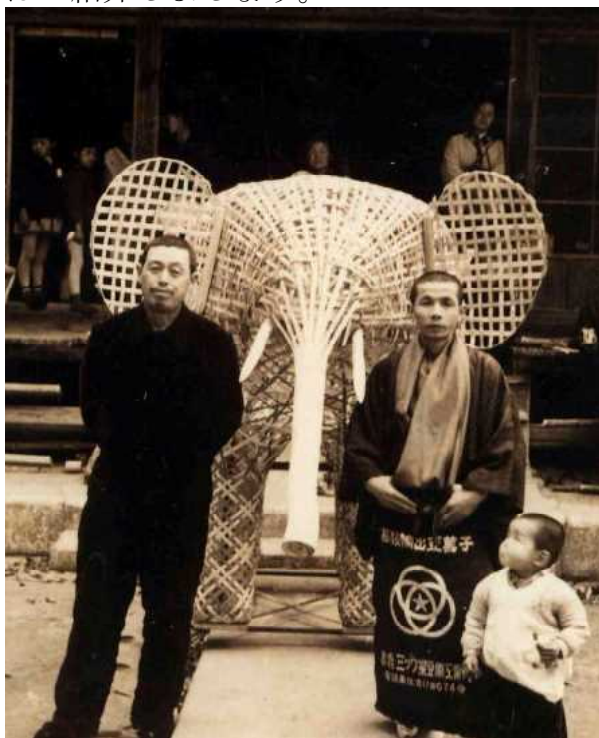
平成19年の春、正光寺の花まつりは復活を遂げました！！



上の写真は現在の花まつりのようす。そして右の白黒写真は昭和34年ごろの貴重なものです。今号ではその変遷と、花まつりへの想いを連ねてみました。昔の正光寺の風景や時代の変化など、そこからいろいろなものが見えてきます。



戦後の目覚ましい復興もようやく一段落したころでしょうか、昭和30年代初頭あたりから人々の心にも少しずつゆとりが生まれ始めました。同時に日本人としてどの方向に向かって生きていくべきかの模索も始まりました。そんな中、仏教界も本来の布教活動に回帰する動きが広がっていきました。というのも、戦時下では翼賛体制のもと、国威高揚の布教を否応なしに強いられており、仏教のそれとはかけ離れたものだったからです。正光寺でも先代恵澄和尚は昭和30年に入寺してから荒廃した正光寺の立て直しに努める傍ら、紙芝居や幻燈、日曜学校などを通して布教に力を入れ始めました。花まつりもその一つです。ここにその当時の写真を見つけたので先ずはご紹介しましょう。



恵澄和尚と藤森浜吉氏の共同制作のゾウさんは竹かご作りの応用から始まりました。右下のチビは現住職正澄和尚、後ろには姉さんたちの姿も…



完成したゾウさん。本物のゾウくらいの大きさと、花見堂も立派です。背景には現在の築山も見えますが、うっそうとしていますね。



当時はテレビもなく、娯楽と言えばラジオや外でみんなと遊ぶ程度。たま〜に映画館で白黒を見に行くことができたとしたら、それは大層な贅沢でした。だから始めたばかりの花まつりでもこんなに人が集まったのでしょう。正光寺を始め、笠井・豊西のお寺でそれぞれに白ゾウを作ってパレードをし、笠井観音に集結して法要を行ったようです（写真右下）。いろんなゾウが集まる中で、「正光寺のゾウさんが一番かっこよくて誇らしかった。」とおっしゃるのは当時を知る大先輩たちです。

それから何年くらいこの行事が続いたのかは定かではありませんが、残念ながら自然に消滅してしまったのだと思われます。正光寺のゾウさんは遠く奥山方広寺まで出向いては大活躍したようです。その方広寺での花まつりも時代とともにいつしか途絶えてしまいました。その後40年以上も経ってから、正光寺のゾウさんの孫が本堂脇の床下で眠っているのを見つけたので大修理を施し、薪流会（大井際断管長の弟子たちの集まり）として浜松中心部で花まつりを行なったのが平成18年でした。そして翌年、折角正光寺に縁のあるゾウさんなので、古巣でも花まつりをぜひ…ということで、翌19年から再スタートしたのが現在の正光寺の花まつりです。

## では『花まつり』とはいったいどんなお祭りなのでしょう？

花まつりパレードで沿道の皆さんにお配りしている紅白まんじゅうに添えられたメッセージカードにはこんなことが書かれています。

4月8日は**花まつり**おしゃかさまの誕生日

おしゃかさまはおっしゃいました  
山も川も空も海も 花も鳥もどうぶつも  
きみもわたしも みんな みんな 尊い  
そのまんまで みんな すてきなんだよって  
だから・・・  
やさしくなれる  
だから・・・  
仲よくなれるって

なのに どうして・・・  
どうして 憎しみ合うの？  
どうして 争わなくちゃいけないの？

おしゃかさまはほんとうに 悲しんでおられます  
はやく気づいてって 願っておられます



紅白まんじゅうにはゾウさんの焼印が！

## 花まつりのおはなし

今から2,500年ほど昔、インドにカピラバストゥという小さな国がありました。王様はスドーダナ、妃はマヤといいました。マヤ夫人はある夜、白い象が天からおりて来て右のわき腹に入るといっても不思議な夢をごらんになりました。これは「世の人々の苦しみを救う偉大な王子がお生まれになる」という夢のお告げだったのです。のちにマヤ夫人は出産のために里帰りをされました。旅の途中、ルンビニというそれは美しい花園で一休みされたのですが、そこでお釈迦さまはお生まれになりました。伝説によりますとその時、天からは甘くかぐわしい、命をはぐくむ雨が降り注ぎ、お釈迦さまは右手は天を、左手は地を指さし「天上天下、唯我独尊」とおっしゃったのでした。この言葉は「この世で尊くないものは何ひとつない。みんなそれぞれがすばらしい」という意味です。だから傷つけてはいけない、奪ってはならないのだと。だから許し、認め合うことができる。これがお釈迦さまお誕生の逸話であり、お釈迦さまの願いなのです。今日、このおめでたい紅白のおまんじゅうはお祝いのおすそ分けです。人々が傷つけ合うことなく、互いに尊重し合い、いのちのすばらしさを喜び合えるほんとうの平和な世の中がおとずれますように、心から祈りましょう。みんな祈り続けようではありませんか。



お釈迦さまがお生まれになった時、天上から甘くかぐわしい喜びの雨が降り注ぎました。大人も子供も誕生仏に甘茶をかけて祝福します。虚無僧さんの尺八とご詠歌隊のご詠歌もいろいろを添えます。

休憩処では飲み物やお菓子などの歓待を受けました。

小栗茂久さんのお宅です →

藤森弘一さんのお宅です ↓



道路使用許可を東警察署から頂いたり、役員さんは交通整理係も担当して下さいます。

昔は白象を見ただけで「花祭だ、お釈迦様の誕生日だ」と誰でも微笑んだものです。二千年以上も大切に存続された行事や教えも、近現代の日本人から遠くかけ離れたものとなってしまいました。だから復活したのです。ふたたびともされた火を二度と消さぬよう、コツコツと続けようではありませんか。皆様方と意義を共有し、さらなるご協賛をお願い申し上げます。来年は4月8日（日）に開催します。

# 花まつりが『月刊住職』に取り上げられました。

数年前のある日、正光寺の花まつり復活を取材させていただきと東京の出版社(興山舎)から電話がありました。この雑誌は宗派を超えた情報誌で、200ページ・2万部発行されています。



〔平成26年4月号表紙〕

## 積尊降誕会を必ず 成功させる実践

### 少子化にも負けない全国六カ寺に学ぶ

花まつりに子供が集まらないという悩みを聞く。やめてしまう所も多いようだ。だが近年復活させたり、工夫で参詣者を増やしているお寺もある。その状況の秘訣とは。

#### 白象パレードを復活し大盛況 静岡県・臨濟宗方広寺派正光寺

「昔は花まつりや白象の意味はみんな知っていたのに、いまの人は分からなくなっていました。これはまずいなあと危機感を感じて花まつりを復活しました」  
静岡県浜松市にある臨濟宗方広寺派正光寺の松尾正澄住職(五十八歳)は話す。

正光寺では昭和三十年代、先代の時代に白象を手作りし、花まつりに町内で白象パレードを始めた。当時の写真を見ると大勢の子供で、大賑わいなのが分かる。だが、いつしか途絶えてしまった。松尾住職は子供に花まつりが伝わらないことを危惧し、眠っていた白象を使って平成十九年に白象パレードを復活させた。開

催は毎年四月の第一日曜日だ。朝十時。誕生仏を背中に載せた白象がお寺を出発。子供から大人まで数十人が長いロープを引く。子供は普段着で気軽に参加。お寺の周囲約四キロを二時間かけてゆつくりと一周する。行列には十数人の御詠歌隊と数人の虚無僧も加わる。和讃のお唱えと尺八の吹奏を交互にするのが珍しく、人目を引く。

事前準備には警察から道路使用許可を



途絶えていた白象パレードを復活した正光寺

もらう。コースは



子供たちに加え虚無僧や御詠歌隊も行列

交通量の少ない道を選ぶため通行止めにはしないが、檀家が随所に交通係として立ち、十分注意する。当日は役員を中心に二十人が手伝う。約一カ月前に告知チラシを作り、回覧板に入れたり、家々にポステイングしておく。  
賑やかな行列につられて沿道には多くの見物客が出てくる。世話人が一人一人に紅白まんじゅうを手渡す。お寺が特注したかわいらしい白象の焼き印付きで四百人分を用意。小学生にも分かるような易しいお釈迦様の言葉と花まつりの由来



3カ所の休憩所と最後はお寺で甘茶かけ

を書いた小さい紙も同封してある。花まつりを知らない人にも意味を知ってもらえるよいアイデアだ。「このおめでたい紅白のおまんじゅうはお祝いのおすそ分けです。人々が傷つけ合うことなく、互いに尊重し合い、いのちのすばらしさを喜び合えるほんとうの平和な世の中がとおずれますように心から祈りましょう」とお寺のメッセージも記してある。

途中で三回、檀家宅の庭先を借りて休憩。それぞれ誕生仏を安置して甘茶かけをする。檀家が自主的にお茶やお菓子などを用意して協力してくれるという。「三カ所の休憩所でスタンブラーをして景品を渡したり、毎年少しずつ工夫しています」と松尾住職。パレードに参加しなくても灌仏だけに来る近所の人もうんといる。興味を持ち、途中から



加わる人も多いので、お寺に着く頃には百三十名ほどに増えている。最後は誕生仏に甘茶をかけて、般若心経をみんな唱える。子供たちには念珠ブレス、饅頭、お守りなどのご褒美の詰め合わせが待っている。「小さな子も頑張ったと感じてもらえるのではないでしょう。心に残って

れたらいい。昔に比べて娯楽が増え、子供を集めるのは難しいですが、毎年継続することが大切。準備や費用の負担を少なくするのも長く続けるコツなのかも知れませんね。」(松尾住職)

## 正光寺略歴と余話(第7回)

終章にあたり、かつての正光寺がこの地域の三十三所霊場のひとつであった事を記して筆を置くこととしたい。

明治7年板行の「遠江天竜川西三十三所御詠歌」によると、一番・鴨江寺に始まり、五番・中善地（明治23年の地形図によると、まだ当時の中善地の地名は豊町倉中瀬上と羽鳥の源長院の間の地域を示している）の大清寺（昭和14～5年頃まで存在していたという。羽鳥神社の西北、今の昭和製作所と公園辺り、現在は源長院に合併）、六番・羽鳥の安楽寺（現在の源長院辺り）と続き七番に石原の海福寺（石原御嶽神社）、八番・石原の正光寺とある。その御詠歌は七番に「いしはらかいふくじ みにまとふまよひのくもはれわたり みたけのてらにすめるつきかな」八番に「石はら志やうこうじ まいるよりたのみをかける正光寺 はなのうてな(台)にむらさきのくも」とある。遠州人はこれらの御詠歌を歌いながら巡礼していたのである。その他廃寺された寺で源長院に併合された安養寺（八幡寺）が、羽鳥の八幡神社の東北にあったが、この33所霊場には入っていない。この御詠歌、霊場がいつ頃成立されたかははっきりしない。推察すると四国八十八ヶ所巡りを基に遠江三十三所霊場が慶安年間（1648～51）の同時期に成立している。少なくともその後、この「遠江天竜川西三十三所御詠歌」をもとに文政四年（1821）にさらにこれを簡略化した「袖ヶ浦三十三観音霊場」（十九番 上石原村 自光院 世話人 嘉平）が成立しているの、これ以前に成立しているものと思われる。（成立時期1648～1821年）

江戸時代の古地図を見ると正光寺のすぐ南側には古墳があり、今でもその少し南へ下れば蛭子森古墳が現存している。目を東側の豊町倉中瀬に転ずれば、平安時代の延喜式に登録されていた子倉神社（現在の倉中瀬の八幡神社）があった。少しこの神社に触れると遠江風土記伝によれば、千年もの昔、子だくさんで困った人々がよくその付近の松林に赤子を捨てに来た。ある赤子は泣いていて拾われるものもあり、可哀そうにも亡くなってしまう赤子があった。見かねた近在の農家の人々が、亡くなった赤子の供養と、又、授かった子供たちが健やかに育つようと富士山浅間神社の御祭神「木花之開耶姫命」を祀り、小さな神社を建てたという。それより赤子を捨てず、この社に祈れば子は丈夫に育つといわれるようになり、子捨ては無くなり安産や子の成長を祈願するためにお参りする人が多くなったという。ただこの神社は後に天竜川の洪水により流失して、下流の白鳥町に御祭神がたどり着き、それが現在の白鳥町の子安神社であるという。倉中瀬の地名は、天竜川の中の瀬にあったことから子倉中瀬村と言われ、その後、子倉神社は無くなったため今の倉中瀬となったという。又、古地図にはこの場所が死んだ馬の捨て場となっている。今の倉中瀬の八幡神社境内に、コンクリート製のお馬さんが、しめ縄を首にかけて祀られているのもその供養のためであろう。往時の正光寺は近在の寺の本寺として、又、複数の古墳や、数少ない延喜式神社が複数存在した地域（聖域）の霊場として崇められていたことと思われる。

ところで大河ドラマは今、「おんな城主直虎」の物語を放映しているが、今川義元が桶狭間で討ち死にしてその子、今川氏真が今川家の滅びる様を尾上松也が演じている。もとより正光寺は今川義元、氏真と係わりのある祈願寺で、現にそれを伝える氏真の御朱印を蔵している。

徳川家康の妻は瀬名姫（菜々緒が演者）で、その母は



直虎の大祖父直平の娘であるが、龍潭寺の南溪和尚(直虎の大祖父)の妹でもある。実家である以上、里帰りや冠婚葬祭、病気見舞い等で井伊谷に来ているかもしれない。戻ってはいなくともその名代は来ているかもしれない。小説(剣と紅)によると瀬名の父、関口親永の跡を継いだ関口氏経は祝田郷の徳政令を実施せよと氏真の下知状を携えて井伊谷に来ている。その他、今川家重臣が名代としてこの井伊谷に派遣されている。その中には駿府からの道すがら、今川家官寺ともいえるこの正光寺に立ち寄り、今川家の繁栄や戦勝を祈願して、寄進などする者もいたであろう。

井伊氏は六代良直の時代に引佐町の赤佐に移り、その弟の俊直が赤佐氏の始まりで、それより奥山氏が分かれたという。奥山朝清、盛朝、朝良と続き次の直朝は今川了俊に従い九州に赴き戦死。その後を継いで奥山方広寺を創建したのが奥山次郎朝藤である。赤佐俊直の弟の政直が貫名(袋井市)を与えられて貫名を名乗った。政直の曾孫が貫名重忠で、源平の戦いでは伊勢平家に味方して源頼朝の怒りをかい、安房国(千葉県)の小湊に流されて、その土地の梅菊という女と結ばれ、貞応元年(1222)に男子を産んだ。その子が日蓮上人である。重忠と梅菊の墓は袋井市貫名の妙日寺にある。奥山家は奥山神社の西側辺り(竜ヶ岩洞を方広寺方面に少し行ったところ)にあり、現在でも続いている。私の妻の親戚筋にはこの奥山家から嫁いでいるものがある。又、ドラマでは今川氏の目付役ではあるが、精神誠意、井伊家を支える新野左馬之助がいる。やはり今でも直系の後孫が続いていて、龍潭寺の南方面の井伊谷川を渡ったところに住んでいる。往時の家老時代の屋敷跡であろう、現在でも井伊谷の龍潭寺に立派な墓を守っている。現当主の弟が小生と業務の関係があり、時々新野家の話を聞かせてくれる。井伊谷川を気賀方面に下ると気賀の手前で、川の西側一帯に細江町小野の地名がある。この辺が井伊家筆頭家老で今川家の忠実な目付役、小野和泉守の屋敷跡であろう。もともと、この小野家は遣隋使小野妹子に始まり、遣唐使となった小野篁が流罪となり浜北区の尾野に屋敷があったという。その後、引佐赤佐郷に住み着き始め、遠州豊田に分家した小野家が井伊家の客分家老として迎えられたという。

正光寺と今川家の関係から始まり、井伊家と今川家の関係まで同軸で歴史を思い起してみると、この遠州の往時の時代背景が、より鮮明に浮かぶよう採り上げてみた。

最後に当家家系図によると、初代九郎左衛門の孫(開山の姪)が小生の先祖に嫁入りしています。今回、400年遠忌の正光寺余話執筆の機会を与えていただいたことにより、正光寺の昔、先祖の事や古の郷土を偲ぶことができました。厚く御礼申しあげます。合掌

【完】

文責：小栗仁／参考資料：浜北市史、わが郷土(笠井中学校)、我が町文化史笠井、パンプキン3月号

## 正光寺略歴と余話のご執筆に 心から御礼申し上げます

7回に及んで正光寺やその界隈の歴史を解り易く紐解いて頂き、ありがとうございました。正光寺そのものの歴史資料は真言宗から臨済宗に転派した後のものしか存在しませんので、郷土史や人物史、そして小栗仁さんのご先祖や縁者に関わる貴重な資料から模索するしか手立てはなかったと思いますが、綿密な調査研究によって過去に光を当てて下さいました。また、完成披露の折にもレクチャーを頂き、併せて御礼申し上げます。正光寺にとって貴重な資料として後世に遺すことが出来ました。これからも折に触れご教授願いたいと存じます。

檀信徒に代わり遠忌委員会より御礼申し上げます。「ありがとうございました。」

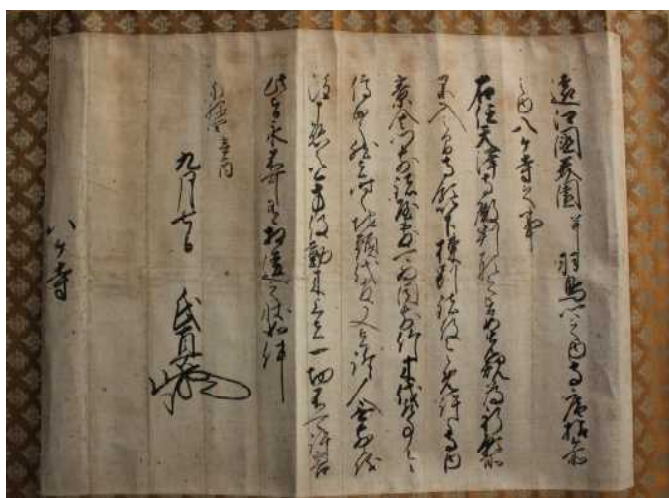
# 正光寺と大河ドラマと・・・？

特別に取り上げるほどの関係ありませんが、折角ですので、小栗仁さんの「正光寺略歴と余話」に幾度か登場した今川氏真（うじざね）から頂いた朱印状をもう一度ご紹介することにしましょう。

## ◇そもそも御朱印とは？

戦国時代から江戸時代初期にかけて、将軍や大名が朱の印を押して使用した公文書。軍事命令や領地の授与、法令の発布、外交文書などに用いられた。朱印は花押の代用として使われはじめ、黒印より重いものとされた。江戸時代には将軍だけが朱印をおすことができた。—学研キッズネットより—

今川氏真が正光寺を祈願所として発行した朱印状



遠江国美蘭並羽鳥郷之内寺庵十ヶ所之内八ヶ寺之事。  
右任天澤寺殿（今川義元）判形之旨。如先規爲祈願所。不入之間。寺領以下。棟別諸役令免許之。寺内寮舎門前諸屋敷可爲同前。竹木伐取事。令停止之。然者。時之地頭代官。又者訴人。無前々儀。雖申懸之。公方役勤來上者。一切不可許容。此旨永不可有相違之状如件。  
永祿四辛酉  
九月七日  
氏真（花押）  
八ヶ寺

## ◇尾上松也さん演じる今川氏真（うじざね）とは？

今川義元の嫡男で蹴鞠・剣術・和歌の名手ともいわれ、甲・相・駿の三国同盟を成立させるため、北条氏康の長女・早川殿と政略結婚。桶狭間の戦いで父・義元は織田信長に討たれ、その後氏真が家督を継承します。でも、今川の統治に対する不満のため、家臣の離反が相次いで起こり、家勢は弱体化していきます。この離反を防ぐための見せしめとして、井伊直親を家臣の朝比奈泰に誅殺させました。そして井伊家を滅亡させようと追い込んでいくのです。が、家臣の松平元康（徳川家康）に裏切られ、同盟を結んでいた武田信玄にも裏切られ、徳川と織田、武田の双方から攻め込まれて、氏真の代で大名としての今川家は終焉したのです。



## 秘蔵写真をこっそりお見せ しましょう

場所は方広寺の坐禅堂。最前列中央がとわの子役の新井美羽ちゃん。向かって右に市原隼人さん、左が小松和重さん。そして後列左から五番目が啓眞副住職です。その他、方広寺派の青年僧の面々とともに収録後の記念撮影で「チ～ズッ！」



## 今川家から賜った朱印状に便乗して・・・

近頃はゲームやコミックの影響もあってかいろんな趣向が出現して面白いですね。その中でも歴史好き女子の「歴女」とか、お寺大好き「寺ガール」たちがもたらした『御朱印』がブームになっているようです。前ページの朱印状とは異なりますが、こちらの御朱印のもともとの意味は、般若心経などの経文を写経して、それをお寺に納めた（納経）証しに頂くものが御朱印です。今では全国の神社仏閣を参拝した記念のスタンプ収集のようになってきましたが、中にはプレミアムが付くほどの価値が高くなったものまであるんだそうです。



◇実は正光寺にもあるんです、三種類のご朱印帖が…(^^♪)



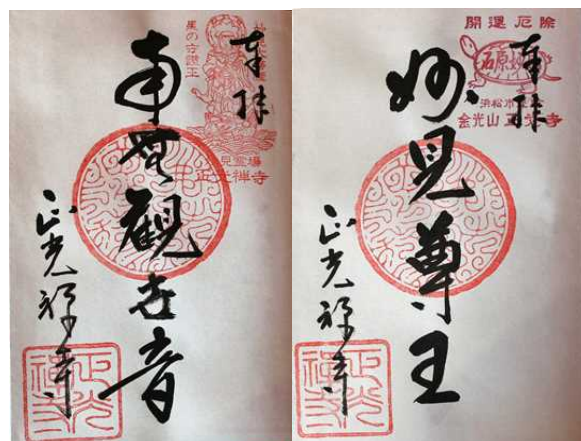
〔ちりめん椿〕



〔ふくろう〕



〔紅白つばき〕



\*\*\* 三種いずれも1さつ 1800円で

(ご朱印入り)\*\*\*

☞ 正光寺のご本尊様の南無観世音菩薩(左)と、鎮守様の妙見菩薩(右)の御朱印です

## いっぷく拝見(その2) 正光寺所蔵の涅槃図をご紹介します

### 涅槃図（ねはんず）とは…

お釈迦様は35歳で悟りを開かれてから45年間、インド各地を行脚して仏法を説き広められました。そして80歳になって生れ故郷へ向かう途中、純陀（チュンダ）が供養した茸に中毒して体調を崩し、クシナガラ跋提河のほとり、沙羅双樹のもとで亡くなりました。その模様は『涅槃経』という經典に記されていますが、それに基づいて描かれたのが仏涅槃図です。

涅槃とは梵語のニルバーナを漢字にあてた語で、「消滅する」という意味ですが、すべての煩惱が消滅して悟りを完成させた境地を指します。釈尊の死を「涅槃に入る」というのはそのためです。図の中央に宝台に横たわるお釈迦様が描かれ、涅槃経に記すように「頭北面西右脇（北枕・右脇下・西向き）」で、大寂静の涅槃の境地で全身が金色に輝いています。

正光寺のこの涅槃図の筆者や年代などは残念ながら不明ですが、縦216cm×横90cmの掛け軸となっています。

- ◆天地宇宙のあらゆる仏神から弟子・鳥獸・虫に至るまでがお釈迦様の死を悼み、嘆き悲しんでいる様子が描かれています。中でも宝台の下で悲しみのあまり悶絶しているのが、十大弟子のひとり阿難尊者です。
- ◆お釈迦様は生後7日で母親を亡くされます。その亡きお母様が天上の忉利天から天女を従えて駆けつけました。
- ◆お釈迦様の奥には8本の樹（沙羅双樹）が見えますが、釈尊の死への悲嘆からか突如4本が枯れてしまったといわれます。しかし残る4本はお釈迦様の教えが永遠に語り継がれるように、より榮んに咲いたと言われていました。現代の葬儀でも白い4本の木を立てるのはこの故事に由来します。釈尊入滅は二月十五日でしたから空には満月が照らしています。
- ◆人々の中で供物を持っているのが純陀です。お釈迦様は彼から受けた食事が元で亡くなったと伝えられており、容態が悪化するお釈迦様を見た阿難尊者は、純陀の食事を受けるべきではなかったと嘆きます。しかし、お釈迦様は「私は彼の食事によって寿命を迎えることができた。臨終の前に食事を捧げることは最も尊い行いなのだ」と諭しました。この言葉には、純陀を思いやる慈しみの心と、死は厭うべきではないという仏教の教えが表現されています。



## 檀家さんの声をお寄せいただきました

東区豊町上 森田泰之

浜北区上善地 大栗忠則

私はバスの運転手でした。そんなご縁からかつては正光寺でもバスを借り切って旅行によく出かけたものでした。檀家の多いお寺でも旅行は難しいのに、毎年よく続くものと思っておりました。

和尚さんが珍しいところをリサーチして計画を練られるのですが、南禅寺で湯豆腐を食べたり、宇治万福寺の研修道場に泊まって坐禅を組んだり、中国様式の仏堂などの説明も聞いたり、ツテがあればそれをたどって活かす、宗派の違いがあっても積極的に連れて行こうとされました。また、三島の龍澤寺では年に一度の寺宝に風を当てる特別公開も見学し、箱根の木造老舗旅館・福住楼に泊まり、翌日は箱根遊覧と、いつもお寺の旅行は和尚さんがよく探してきたなど感心するコースばかりでした。鎌倉や奈良、山梨…、十周年では遠く中国まで飛んだこともありました。

そんな昭和の時代は世の中も成熟していて、私たちも若かったこともあり、楽しかったものです。平成に入って29年、世の中の変化とともに正光寺も少しずつ充実してきました。花まつりの復活、ご詠歌隊の結成、朝市や精進料理に加え、庭の整備なども。そんな中、本堂の耐震化の議論が始まり、検討の末新築決定。そして檀信徒一丸となって無事完成することが出来ました。また啓眞さんは大徳寺での修行から帰られて本山勤務と副住職の日々の中、目出度く結婚され第一子の誕生…と、正光寺は檀家さんに支えられながら確実に前進していると誇りに思っております。これからもより一層、ともに盛り立てていこうではありませんか、私たちの正光寺なのですから。

私が正光寺さんを初めて訪れたのは12年前になります。生まれて間もない孫の死を受け容れることもできぬままに、親たちに代わって相談できるお寺をあてもなく探して回りました。正光寺さんにたどり着いた時には、もう暗くなっておりましたが、その中で大念仏の奉納が行われていました。不思議なご縁を感じながらご住職に相談すると親切に対応して下さい、葬儀から七日経や盆・彼岸など折々にお経に来て下さり、長男や次男の家族たちもそろってお経を読み、いつの間にかお経が日常に溶け込むようになってきました。

私は平成元年に生コン圧送ポンプ車の事業で独立したのですが、今では安心して任せられる息子たちや従業員、そして孫たちに恵まれ幸せな日々を送っています。日課のお墓参りに伺うといつも和尚さんや奥さんが境内のお掃除をしておられ、清々しく迎えて下さいます。「本当によくお墓参りされますね、感心ですヨ。」と仰って下さいますが、これも仕事場がお寺さんと近いご縁を頂いてとても感謝しています。

この度は本堂や書院などがご立派に完成されましたが、この何百年に一度の大工事の基礎部分でお手伝いをさせて頂けたことを本当に有難く誇りに思っております。高層マンション並みの頑強な基礎でしたので、これからも益々正光寺さんはじめ檀家さんのご繁栄は間違いなしと確信しております。

檀家の一員となって12年、この夏には孫の13回忌を迎えます。

### 編集後記

白黒写真の説得力には驚かされます。集う人々の熱意まで伝わってきます。花まつり復活は住職の言うように子や孫への大切な遺産で、我々の重要な役目だと思います。同じ意味で小栗仁氏の歴史研究も意義深く、連載稿了は淋しくもありますが、またの機会に起筆願いたいものです。遠忌事業は建設関係は一段落しましたが、まだ400年遠忌までには課題もあります。最後まで引き続き御協力をお願い申し上げます。

◇発行：〒431-3101 浜松市東区豊町749 金光山 正光寺  
TEL (053) 434-0800 FAX (053) 443-7410  
正光寺ホームページ <http://shokoji.info>

◇編集：「正光寺開山400年忌報恩記念事業実行委員会」総務部会

